

フランス語の情意形容詞 *sacré / fichu / sale* について

山 本 大 地

目 次

1. はじめに
2. 「量的意味」という概念についての批判的検討
3. 「強意」の意味に関する三つの情意形容詞の違い
4. 各情意形容詞の意味特性
5. おわりに

キーワード：フランス語、意味論、形容詞分類、情意形容詞、強意

1. はじめに

現代フランス語の伝統文法において «adjectif qualificatif» 「品質形容詞」と «adjectif relationnel» 「関係形容詞」を区別することは、すでに慣例になっている (cf. Arrivé et al., 1986, 33)。近年では、このどちらにも当てはまらない形容詞クラスが存在が指摘され始めてきた。«adjectif inclassable» 「分類不可能な形容詞」 «adjectif du troisième type» 「第三タイプの形容詞」 (Schneidecker, 2002) 等と呼ばれ、このクラスはさらに、«adjectif classifiant» 「分類形容詞」、«adjectif référentiel» 「指示的形容詞」、«adjectif affectif» 「情意形容詞」の三つのクラスに下位分類される (Goes et Moline, 2010, 7)。例をそれぞれ挙げておく。

- (1) un livre *intéressant* (品質形容詞)
「面白い本」
- (2) le discours *présidentiel* (関係形容詞)
「大統領の演説」
- (3) du champagne *brut / doux* (分類形容詞)
「辛口の / 甘口のシャンパン」
- (4) un *ancien* ministre (指示的形容詞)
「元大臣」
- (5) cette *sacrée / fichue / sale* bagnole (情意形容詞)
「この忌々しい車」

本稿では、このうち情意形容詞に焦点を当てる。このクラスには、*sale, sacré, fichu, foutu, satané, maudit* といった形容詞が含まれ、「情意形容詞」以外にも «adjectif intensif» 「強意形容詞」(Giry-Schneider, 2005), «Adjectif de Qualité» 「質の形容詞」(Milner, 1978) 等、研究者によって様々な名称がつけられている。

さて、情意形容詞は以下のような統語的特徴をもつことが Milner (1978, 208) によって指摘されている。

i. 属詞位置では使用できない／使用可能な場合意味が異なる。

(6) * Pierre est *satané*. (Milner, 1978, 208)

「ピエールはひどい。」

(7) Ce *fichu* imbécile ≠ cet imbécile est *fichu*. (*Ibid.*)

「この忌々しい馬鹿野郎 ≠ この馬鹿野郎はもう終わりだ。」

ii. 程度修飾を受け付けない。

(8) * un très *satané / sacré / fichu / sale* / imbécile (*Ibid.*)

「とても忌々しい馬鹿野郎」

iii. 必ず前置修飾される。

(9) * un imbécile *fichu / satané / sacré* (*Ibid.*)

これらの特徴は Schnedecker (2010) によると、情意形容詞を「第三タイプの形容詞」とみなす根拠となる。このような統語的特徴をいかに捉えるかは問題だが、もう一つの大きな問題にこれらの形容詞の意味をどのように捉えるかというものがある。Giry-Schneider (2005, 164) によると、これらの形容詞は «sens affectif» 「情意的意味」と «sens quantitatif» 「量的意味」という二つの意味をもつ。

(10) a. Cette *fichue* fièvre ne diminue pas.

「この忌々しい熱が下がらない。」

b. Cette *fichue* ressemblance intrigue les experts.

「この嫌な類似性が専門家を気がかりにさせている。」

(11) a. Léo a une *fichue* fièvre.

「レオはすごい熱がある。」

b. Il y a une *fichue* ressemblance entre ces deux tableaux.

「この二つの絵にはたいへんな類似性がある。」

ところが、情意形容詞と呼ばれる様々な形容詞の意味をよく検討してみると、「情意」「量」と

いう概念のみでは捉え難い側面をもつことがわかる。本稿では、その複雑な意味を捉える試論として、主に *sacré*, *fichu*, *sale* を取り上げ、各形容詞がどのような意味を表すのか、それぞれの違い、特徴は何かを考察する。次節に移る前に、これらの形容詞の統語的位置と意味の関係について少しだけ触れておきたい。Milner の挙げる統語的特徴からわかるように「情意形容詞」という名称でこれらの形容詞を呼ぶとき、通常前置修飾の用法を指す。しかしながらこれらの形容詞の大部分は、後置修飾、及び属詞位置での使用も可能である。ただその場合、意味が大きく異なる。*sacré* を例にとろう。

- (12) J'ai une *sacrée* chance.

「私はすごい運がある。」

- (13) La famille, c'est *sacré*.

「家族はかけがえのないものだ。」

- (14) Le ramadan, c'est un moment *sacré* pour nous.

「ラマダン是我们にとっては神聖な時間だ。」

sacré は (12) のように前置修飾された場合、強意の意味を表す。この点についてはのちに詳しく考察する。一方、(13) (14) のように、属詞位置や後置修飾に使用された場合、「かけがえのない」「神聖な」といった全く異なった意味を表す。本稿では、*sacré*, *fichu*, *sale* が情意形容詞と呼ばれる前置修飾の用法のみを分析対象にし、属詞位置での使用および後置修飾については最小限の言及に留める。

2. 「量的意味」という概念についての批判的検討

まず、Giry-Schneider (2005) が «sens quantitatif» 「量的意味」と呼ぶ意味を検討することから始めたい。この意味を量という概念で捉えることは果たして妥当だろうか。結論から言うと、この意味を単なる「量」とみなすには問題がある。その根拠として、まず単純に多量の存在物を表現することができないことが挙げられる。

- (15) # Il y a une *sacrée* / *sale* / *fichue* voiture ici.

× 「たくさんの車がここにある。」

“×” はカギ括弧内に示した期待通りの意味を得ることができないことを示す。

cf. Il y a beaucoup de voitures ici.

「たくさんの車がここにある。」

その理由は明らかで、voiture が可算物であることに原因がある。なお、名詞を複数にして «Il y a de sacrées voitures» としても「たくさんの車」という解釈は得られない。したがって情意形容詞が Giry-Schneider (2005) が言うところの「量的意味」をもちえるのは、不可算物に関してである。しかし不可算であれば十分なわけではなく、ある程度抽象的な概念である必要がある。

- (16) a. # J'ai bu un sacré / sale / fichu vin.

× 「私はたくさんのワインを飲んだ。」

- b. # Il y a une sacrée / sale / fichue viande ici.

× 「たくさんの肉がここにある。」

- (17) a. Il a un sacré / fichu culot.

「彼はたくさんの大胆さをもっている。→ 彼はとても大胆だ。」

- b. Il a une sacrée / fichue patience.

「彼はたくさんの我慢強さをもっている。→ 彼はとても我慢強い。」

- c. Il m'a donné une sacrée / fichue douleur.

「彼は私にたくさんの痛みを与えた。→ 彼は私をとっても苦しめた。」

vin 「ワイン」、viande 「肉」も culot 「大胆さ」、patience 「我慢強さ」、douleur 「痛み」も、不可算の概念を表すという点では共通しているが、具象的な概念か抽象的な概念かという点で両者は異なる。そして情意形容詞による「量的意味」の対象となるのは後者のみである。この特徴は、quel を用いる感嘆文（以下 *Quel...!*）に類似している。量に対する感嘆を表す *Que de...!* に対して、*Quel...!* は質に対する感嘆を表すとされ、この感嘆文も、可算物であれ不可算物であれ、具象的な概念の量に言及することはできず、不可算でかつ抽象的な概念のみがその意味操作の対象となる¹⁾。

- (18) a. # *Quelle* voiture !

× 「なんてたくさんの車！」

- b. # *Quel* vin !

× 「なんてたくさんのワイン！」

- (19) a. *Quel* culot (il a) !

「なんて大胆さ（を彼はもっているんだ）！」

- b. *Quelle* patience (il a) !

「なんて我慢強さ（を彼はもっているんだ）！」

- c. *Quelle* douleur (il m'a donnée) !

「なんて痛み！（を彼は私に与えたんだ）！」

以上の検討から、情意形容詞がもつこの種の意味を、単なる「量」と呼ぶのは問題があるといえるだろう。ではどのように捉えるべきだろうか。culot / patience / douleur は、culotté「大胆だ」、patient「我慢強い」、dououreux「苦しい」という類似した形態をもつ品質形容詞が存在することからわかるように、性質の概念との近接性を認めることができる。すると、*sacré / fichu culot*, *sacrée / fichue patience / sacrée / fichue douleur* が表す意味は、*très culotté / patient / dououreux*「とても大胆だ／我慢強い／苦しい」に相当するとみなすことができる。このことから、本稿ではこの意味効果を、性質の程度の高さを強調するという意味で「強意」と呼ぶことにする。また以下でみるように、この捉え方は *sacré con*「すごい馬鹿」のような場合の意味を把握する上でも利点がある。

3. 「強意」の意味に関する三つの情意形容詞の違い

「情意形容詞」と呼ばれる形容詞クラスには、*sacré*, *fichu*, *foutu*, *sale*, *satané*, *maudit* 等が分類される。これらの形容詞は一見均質なクラスをなしているように見えるが、実はかなりの違いが存在する。ここでは *sacré*, *fichu*, *sale* を取り上げ、特に上で定義した「強意」という意味との関連においてその違いを記述する。

まず、もう一度性質の概念を表す名詞とこれらの形容詞との組み合わせをみてみよう。

(20) a. Il a un *sacré culot*.

「彼はたくさんの大胆さをもっている。→ 彼はとても大胆だ。」

b. Il a un *fichu culot*.

「彼はたくさんの大胆さをもっている。→ 彼はとても大胆だ。」

c. ? Il a un *sale culot*.

× 「彼はたくさんの大胆さをもっている。→ 彼はとても大胆だ。」

sacré, *fichu* はある人物の大胆さの程度が高いことを表し «Il est très culotté.» 「彼はとても大胆だ」と言い換えることができる。厳密に言えば、*sacré*, *fichu* が表す程度の高さは *très* では捉えきれない側面があるように思われるが、この点は保留しておく。いずれにせよ、性質的概念に対する強意の役割を担っているといってよい。一方、*sale* については *très* に相当する強意の解釈ができない。つまり強意語の役割を果たすことができないのである。しかしながら «?Il a un *sale culot*.» 「彼は汚い大胆さをもっている」はやや奇妙に響くとはいえ解釈可能である。この場合、culot にもいろんなタイプがある中で、当該の人物がもつ culot は、*sale culot* である、という性質規定の解釈になる。つまり「大胆さ」の中でも、否定的な評価を伴うような「大胆さ」（例えば「厚かましい」「ずうずうしい」）という解釈になる。

続いて、culot 等とは異なった形で性質の概念を含意する名詞との組み合わせを考えてみた。例えば con「馬鹿」coquin「いたずらっ子」といった名詞（«nom de Qualité», cf. Milner, 1978）は抽象概念ではなく個別的な人を指す名詞だが、その意味の中に明らかに «être con»「馬鹿だ」「être coquin」「いたずら好きだ」という性質の概念を含んでいる。

(21) a. C'est un *sacré* con / coquin !

「こいつはすごい馬鹿／いたずらっ子だ。」

b. ?? C'est un *fichu* con / coquin !

×「こいつはすごい馬鹿／いたずらっ子だ。」

c. # C'est un *sale* con / conquin !

×「こいつはすごい馬鹿／いたずらっ子だ。」

sacré は culot との組み合わせ同様、très に近い強意の意味効果をもつ。これらの名詞に対しては、もはや量という概念は通用せず、やはり強意とみなすほうが適切である。*fichu* に関しては、culot とは異なり con, coquin との組み合わせでは不自然に感じられ、強意の解釈をもたない。用例は若干見つかるが、古めかしく感じられ、強意の用法ではなく否定的評価を伴う性質を表す。

(22) *Fichu* coquin, tu m'auras pas !

(Jacques Mallouet, *Japperenard*, 48)

「いたずらっ子め、君に僕がつかまえられるものか。」

sale に関しては、«être con / coquin» の程度の高さを表すのではなく、やはり culot との組み合わせ同様、どのような con, coquin かを述べる、対象の性質に言及する意味をもつ。

続いて、性質の概念が明示的ではない通常の名詞との組み合わせを見てみよう。例えば bagnole「車」のような名詞は、culot や con とは違い、程度差を想定し得る性質の概念を明示的な形で含まない。

(23) C'est une *sacrée* bagnole.

「これはすごい / ひどい車だ。」

(24) C'est une *fichue* bagnole.

「これはひどい車だ。」

(25) ? C'est une *sale* bagnole.

×「これはひどい車だ。」

sacré については、このような名詞と結びつくとき、文脈がなければ肯定的な評価とも否定的な評価とも解釈可能である。例を挙げよう。

(26) a. En voilà une *sacrée* maison où l'on a toujours des secousses !

(Emile Zola, *La joie de vivre*, 386)

「もうひどい家なんですよ、いつもガタガタ揺れるんですから。」

b. (新築の家についてのコメントで)

waow, c'est une *sacrée* [sic] maison ! Pouvez-vous me dire si vous êtes restés dans votre budget initial ?

(<http://www.bricozone.be/fr/construction/t-entrepreneur-construction-contemporaine-en-wallonie--page2-5603.html>)

「わあ、すごい家ですね。当初の予算内に収まりましたか？」

このように *sacré* は «être très bon» 「とてもよい」 «être très mauvais» 「とても悪い」の、どちらの性質も表現できる。どちらの性質の解釈であってもそこに強意のニュアンス (*très*) が加わる。ただし *sacré* は肯定的評価の意味が強く、否定的な評価の解釈が困難と感じるインフォーマントが多数いる。*sacré* は肯定的評価を伴う性質に特化されつつある可能性がある。

一方 *fichu*, *sale* については、否定的な評価を伴う性質の解釈 «être mauvais» のみが可能である。ただし *sale* に関してはやや不自然であり、単に対象物の質が悪いことを表すのではないと考えられる。この形容詞は話し手の不快感、軽蔑といったコノテーションを強く含意するように思われる。この点はのちに個別に形容詞を検討する際に再び触れることにする。

以上の考察から次のことがわかる。まず *sacré* は、どの名詞との組み合わせでも、安定して強意の意味役割を果たす。*fichu* も *sacré* に近いが、*fichu* は名詞によっては強意の役割を果たすことが難しい場合がある。*sale* に関しては、どの名詞との組み合わせにおいても強意の意味役割を担うことはない。

以下では *sacré*, *fichu*, *sale* を個別に検討し、さらに特徴づけを試みる。

4. 各情意形容詞の意味特性

sacré

sacré が他の情意形容詞と大きく異なるのは、その強意語としての性質にある。すでに見たように、*sacré* はどのような名詞とも共起し、その名詞が表す概念に対して強意語の役割を果たす。この特徴は *Quel...!* と類似している。というのは、*Quel...!* も概ねどのような名詞を用

いた場合でも強意の意味が生まれるからである。よって *sacré* の特徴として *Quel...!* との類似性を指摘できる。

(27) a. *Quel culot (il a) !*

「なんて大胆さ（を彼はもっているんだ）！」

b. *Il a un sacré culot.*

「彼はたくさんの大胆さをもっている。→彼はとても大胆だ。」

(28) a. *Quel con !*

「なんて馬鹿！」

b. *C'est un sacré con.*

「こいつはすごい馬鹿だ。」

また、性質の概念が明示的でない概念を表す名詞との組み合わせでは、*sacré* は肯定的な評価を伴う性質、否定的な評価を伴う性質のどちらの解釈も可能であることを指摘したが、その点についても *Quel...!* は類似性を見せる。

(29) a. *Quelle bagnole !*

「なんて車！ → すごい／ひどい車」

b. *C'est une sacrée bagnole.*

「これはすごい／ひどい車だ。」

(30) a. *Quelle maison !*

「なんて家！ → すごい／ひどい家！」

b. *C'est une sacrée maison.*

「これはすごい／ひどい家だ。」

このように、*Quel...!* は様々なタイプの名詞に対して強意の意味効果をもち、そして肯定的・否定的どちらの評価を伴う性質でも表現可能という点で、*sacré* と *Quel...!* は類似しているといえる。しかしながら両者には違いも存在する。その違いについて大きく二つの点を指摘できる。一つは、文脈の効果の違いである。*Quel...!* は反射的な発話というニュアンスがあり、何らかの出来事に反応する形で発話される。一方 *sacré* にはそのような文脈はむしろ親和しない。例えばカフェで店員にコーヒーをこぼされたという文脈では *Quel...!* のみが自然になる。

(31) a. *Quel con !*

「なんて馬鹿！」

?? C'est un *sacré* con.

「こいつはすごい馬鹿だ。」

一方、後日この店員について話すときには *Quel*...! よりもむしろ *sacré* のほうが自然になる。

(32) a. ?? *Quel* con !

「なんて馬鹿！」

b. C'est un *sacré* con.

「こいつはすごい馬鹿だ。」

同様に、恐ろしい夢を見て目が覚めた瞬間に自然なのは *Quel*...! であり *sacré* ではない。

(33) a. *Quel* cauchemar (j'ai fait) !

「なんて悪夢（を見たんだ）！」

b. ?? J'ai fait un *sacré* cauchemar.

「すごい悪夢を見た。」

それに対し、その悪夢について後に友人等に話すときは *sacré* のほうが自然になる。

(34) a. ?? *Quel* cauchemar (j'ai fait) !

「なんて悪夢（を見たんだ）！」

b. J'ai fait un *sacré* cauchemar.

「すごい悪夢を見たよ。」

二つ目の違いは、固有名詞を使用した場合に明確に現れる。

(35) a. *Sacré* Paul !

「さすがポール！」

b. * *Quel* Paul !

「なんてポール！」

Quel...! は固有名詞の使用を認めないが、*sacré* は固有名詞と共起可能であり、その際の *sacré* の解釈は特殊である。この例は、「さすがポール!」「ポールってやつは!」等と訳すことが可能であり、ポールがポールらしいと思わせる行為を再び行った文脈で発話される。次の実例を

見よう。話し手は弟のヤンとうまくいっておらず、弟は自分のことを話したがない。「*Sacré Yang !*」は、弟のそのような性格を再確認する発話である。

(36) - Si je comprends bien, mon frère ne vous a pas parlé de moi ?

- Pas le moins du monde ! (...) Je suis désolé, sincèrement.

- Bah ! Vous n'y êtes pour rien !... Ah ! *Sacré Yang !* Toujours le même !

(Brigitte Cassette, *La Croisière de Monsieur Dubagout*, 89)

「弟は僕について話さなかったようですね。」

「全く。(…) 本当に申し訳ないのですが。」

「あなたのせいではありませんよ。まったく、ヤンってやつは！ 相変わらずだなあ。」

この用法は、少なくとも程度差を想定可能な概念の程度を強調するという意味での「強意」と呼ぶことはできない。ではこの用法をどのように捉えるべきだろうか。「強意」の用法とどのように関連しているのか、統一的に把握可能か、という視点から考える必要があるだろう。

なお、*fichu* も *sale* もこのような用法をもたず、*sacré* を特徴づける用法といえる。

sale

sale は、強意語の役割を果たさず、常に *sale* 自体が性質の意味を表すことを述べた。しかし性質の意味を表すのであれば、今度はその情意形容詞としての位置づけが問題となる。なぜなら、対象物の性質を述べることは、品質形容詞の一般的な意味に他ならないからである。*sale* は他の情意形容詞同様、前置修飾だけでなく、後置修飾、属詞位置での使用も可能である。*sale* の場合、前置修飾と後置修飾・属詞位置での使用の意味の違いは不明確な場合も存在するが、概ね次のようにいうことができる。後置修飾・属詞位置の使用では、*sale* は *crasseux* 「汚い」のような物理的な汚さを伴う性質を表し、*propre* 「清潔な」の反義語となる。

(37) a. A votre arrivée, dans la cuisine, vous trouvez l'évier rempli de vaisselle *sale*.

(Gary Chapman et Sabine Bastin, *Couple & Complices*, 2005, 79)

「家について、台所で汚れた食器でいっぱい流しに気づく。」

b. Le lave-vaisselle suit son cycle normalement, mais la vaisselle est toujours *sale*.

(http://forum.hardware.fr/hfr/Discussions/Viepratique/reparder-vaisselle-martin-sujet_82006_1.htm)

「食器洗い機は普通に動いているのに、食器は相変わらず汚れている。」

この意味用法は、後置修飾・属詞位置の場合のみに生じ、前置修飾では現れない。つまり

«une *sale* vaisselle» と言い換えることができない。

一方前置修飾, すなわち, 情意形容詞と見なされる用法では, 意味がより抽象的になり, 一般的な意味で好ましくない性質, すなわち *mauvais* の意味を表すとされる (cf. *TLFi*)。

(38) je sais qu'il a eu de *sales* histoires et que la police l'a à l'œil.

(Proust, *La Prisonnière*, 1922, 280)

「彼がやっかいなトラブルに巻き込まれて警察に監視されているのは知っている。」

しかしそれでも情意形容詞という形容詞の位置づけに疑問が残る。例え抽象的な意味であっても, 対象物の性質を表すのであれば, *sale* の意味は品質形容詞の意味範疇に収まるのではないだろうか。実際抽象的な意味でかつ前置修飾を行う品質形容詞は存在する。まさに *mauvais* がそれである。この問題に対して, 現時点では次の点を指摘できる。*sale* が表すのは単なる «être *mauvais*» というような性質ではなく, そこには不快感, 軽蔑を伴う性質というニュアンスがあるように思われる。したがって, *sale* は不快感, 軽蔑, 差別といった情意の対象となりやすい概念を表す名詞と親和する。

(39) *sale* boulot / temps / guerre / flic / gosse / juif / voyou

「汚い仕事／天気／戦争／警官／がき／ユダヤ人／ごろつき」

このようなニュアンスが対象の性質をなすのかどうかを検討する必要があるだろう。

fichu

fichu は, 限られた名詞との組み合わせで強意語の役割を担うこと, 否定的な評価を伴う性質を表すことを指摘した。しかし, どの例に関してもインフォーマントの反応はあまり好ましくなく, 常用語ではないと感ぜられるようである。実際, 強意語の意味役割をもった用例は, 現代の著作ではあまり見つからない。ところがその一方で, インフォーマントが比較的常用表現と判断する用法が存在する。それは次のような用例であり, インターネット上の掲示板や 2000 年代の小説でも用例がかなり見つかる。

(40) a. マッチを擦るが火がつかない :

Mais qu'est-ce qu'elles ont, ces *fichues* allumettes ?

(Denis Côté, *Les otages de la terreur*, 38)

「いったいどうしたんだ, この忌々しいマッチめ！」

b. Il ne reste plus qu'à savoir qui il voulait faire chanter et où est cette *fichue* cassette.

(Guy Lavigne, *Mourir sur fond blanc*, 76)

「残る問題は、彼が誰を脅そうとしていたのか、そしてこの忌々しいカセットがどこかということだけだ」

- c. Elle est enrhumée depuis l'automne. Elle est abonnée au nez rouge et aux oreilles bourdonnantes à cause de cette *fichue* climatisation.

(Danièle Charlet-hameau, *La fuite, ce sera bien*, 34)

「彼女は秋からずっと風邪を引いている。あの忌々しいエアコンのせいでいつも鼻が赤く、耳鳴りがしている。」

- d. Mais l'insistance de M. STEVEN à récupérer ce *fichu* dossier a complètement contrecarré mes projets.

(Catherine Carrere, *Cauchemar*, 61)

「ステューブン氏がしつこくあの忌々しい書類を回収しようとするから完全に私の予定が狂ってしまったわ」

この用法は、一見否定的な評価を伴う性質 «être mauvais» を表す用法と似ているが、実は大きく異なっている。その証拠に、これらの例における *fichu* を品質形容詞 *mauvais* によって言い換えることができない。

- (41) a. # Mais qu'est-ce qu'elles ont, ces *mauvaises* allumettes ?

- b. # Il ne reste plus qu'à savoir qui il voulait faire chanter et où est cette *mauvaise* cassette.

- c. # Elle est abonnée au nez rouge et aux oreilles bourdonnantes à cause de cette *mauvaise* climatisation.

- d. # Mais l'insistance de M. STEVEN à récupérer ce *mauvais* dossier a complètement...

このことは、意味的な観点から *fichu* を品質形容詞と区別する大きな根拠となる。情意形容詞の中では、*foutu*, *maudit*, *satané* がこれらの例の *fichu* に置き換えることができる。*sale* はやや不自然で意味が変わってしまう。*sacré* は容認するインフォーマントと容認しないインフォーマントに分かれる。そして、現代フランス語でこの文脈に最も自然な表現は、*putain de*, *saleté de*, *saloperie de* といった俗語表現である。類似した表現であるはずの *sale* と *saleté de* が違いを見せる点は興味深い。

この用法は少なくとも程度の高さを強調するという意味での「強意」ではない。そして *mauvais* による言い換えが不可能であることから対象の「性質」を表すのではないといえる。では何を表しているのだろうか。この用法は Giry-Schneider が「情意的意味」と呼ぶ用法の例

が表す意味と同じものだと思われる。ここでこの用法をさらに具体的に記述してみよう。この用法で重要なことは、文脈内で起きている出来事を通して、*fichu* による情意的な評価（憤慨・いらだち）が対象に付与されていることである。a.の例では、マッチに火がつかないという出来事によりマッチに対する憤慨を露わにしている。b.ではカセットが見つからないこと、c.では、エアコンのせいで彼女が風邪を引いてしまったこと、d.ではその書類のせいで話し手の予定が狂ってしまったこと、によってそれぞれ原因となる対象に対して *fichu* の情意的な評価が付与されている。この評価は対象の性質と無関係であってもよい。例えば b.では、カセットが見つからないという出来事から cassette に苛立ちという評価を付与しているのであり、対象の性質はまったく関係しない。*fichu* のこの種の用法を仮に「文脈依存評価」と呼ぶことにし、*fichu* の主要な用法として位置付けておこう。

5. おわりに

以上、本稿では情意形容詞の意味の多様性を捉える試みとして *sacré*, *fichu*, *sale* を取り上げ、その意味を考察した。これらの形容詞に関して現段階でいえることは次の通りである。まず *sacré* は強意語としての性格を強くもち、その性格は *Quel...!* に類似している。そして *sale* は強意の意味役割を担うことができず、不快感・軽蔑を伴う性質の意味を表す。最後に *fichu* に関しては、強意語としての性格をもつが、それは限られた名詞との組み合わせにおいてのみである。むしろ *fichu* を特徴づけるのは、文脈依存評価の意味と考えられる。このような多様な意味は、先行研究が提案する「情意」「量」といった概念で捉えきれないことは明らかである。

「情意形容詞」という形容詞クラスを特徴づける上で、これらの形容詞が品質形容詞の意味といかに異なっているかを問い続けることも重要である。たとえ情意形容詞の統語的な特徴が、品質形容詞と異なるステータスを示しているとしても、意味的にも同じことが言える保障はない。事実その差は微妙であり、かつ連続的なものだと考える。この点についても今後、さらに考察を加えたい。

注

- 1) 不定形容詞 *certain* も、《*un certain* + 抽象名詞》で「不特定のかなりの量」を表し、情意形容詞や *Quel...!* との近接性が見られることを査読者の一人にご指摘いただいた。他にも同じ振る舞いを見せる形容詞があるのか、情意形容詞に限らない、より一般的な現象なのかという点については今後検討を重ねたい。

参考文献

Arrivé, M., F. Gadet et M. Galmiche (1986), *La Grammaire d'aujourd'hui : guide alphabétique de linguistique française*, Paris, Flammarion.

- Giry-Schneider, J. (2005), «Les adjectifs intensifs : syntaxe et sémantique», *Cahiers de lexicologie*, 86, 163-178.
- Goes, J. et E. Moline (2010), «Introduction», in J. Goes et E. Moline (éds.), *L'adjectif hors de sa catégorie*, 7-14, Arras, Artois Presse Université.
- Milner, J.-C. (1978), *De la syntaxe de l'interprétation. Quantités, insultes, exclamations*, Paris, Seuil.
- Schnedecker, C. (2002), «Présentation des adjectifs «inclassables», des adjectifs du troisième type ?», *Langue française*, 136, 3-19.
- Schnedecker, C. (2010), «L'adjectif sacré entre modalité d'énonciation et modalité d'énoncé. Une drôle d'enclosure !», in J. Goes et E. Moline (éds.), *L'adjectif hors de sa catégorie*, 265-287, Arras, Artois Presse Université.
- Yamamoto, D. (印刷中), «L'adjectif fichu qualifie-t-il le nom ?», *Le Français moderne*.

On the affective adjectives in French: *sacré / fichu / sale*

Daichi YAMAMOTO

Contents

1. Introduction
2. Critical study on the notion of “quantitative meaning”
3. Differences in the intensifying meaning between three affective adjectives
4. Semantic properties of the affective adjectives
5. Conclusion

Keywords: French, semantics, classification of adjectives, affective adjectives, intensifying meaning